



1. 子どもたちも雨の中を懸命に走る / 2、3 最後の力を振り絞ってゴールする / 4. 太鼓の演奏でランナーたちを鼓舞する / 5. 故三浦氏の母校・早稲田大学競走部から平子凛太郎さん（写真中央左）と森田将平さん（写真中央右）が招待選手として10^{キロ}の部に出場した

「雨にも負けず、力走」

10月22日、第38回三浦弥平杯ロードレース大会が、梁川分庁舎をスタート・ゴールに行われました。この大会は、県内初のオリンピック選手である故三浦弥平氏の功績を称える大会として毎年開催されており、今年は1,318人がエントリー。当日は朝から冷たい雨が降り、過酷な条件の下でのレースとなりましたが、全国から集まったランナーたちが秋の梁川路を駆け抜けました。メインとなる一般ハーフA（21.0975^{キロ}）の部では、男子は柳田尚皓さん（栃木県）が1時間20分55秒で見事初優勝。女子は熊谷順子さん（福島市）が1時間33分1秒で制し、3連覇を果たしました。

市長日誌「中心市街地の活性化」

過日、ドイツ在住のジャーナリスト高松平蔵氏、SWC首長研究会のメンバーである新潟県三条市の国定市長、それに当市の伊達まちづくり会社（まちづくり伊達）のアドバイザーである西村浩先生の3人をお招きして、「高齢社会における商店街のあり方」のシンポジウムを開催いたしました。

車社会の今、我々の生活スタイルはマイカーで郊外の大型ショッピングセンターへ出かけ1週間分の食料を買い込み大型冷蔵庫に何でも詰め込んでおく、他の生活品も広い駐車場を備えたロードサイド店に出かけて行くという事ですから、街中の店はくしの歯が欠けるように閉店して中心商店街は空洞化しているのが実情です。

シンポジウムでは、高松氏は、ドイツにおける官民による大胆な変革への取り組み、すなわち、LRT（低床電車）などの公共輸送機関の整備に合わせて街中への車の乗り入れを認めないなどの方策を、国定市長は、マルシェ（フランス語で市場）の開催を継続的に取り組み、空洞化した街の賑わいの復活に取り組んでいる話があり

ました。西村氏からは、氏の故郷である佐賀市での空き地だらけで駐車場ばかりが目立つ状況に対し、空き地に芝生を子ども達に植えさせ、不要となったコンテナを置いて遊びの中心から賑わいを取り戻して行った話、すなわち、街中でのイベントの効用の話がありました。

当市も三条市を参考に掛田や伊達地区でマルシェを開催し、あわせて「まちの駅」などの設置とそこのイベントにより一定の成果が得られつつあるところです。

高齢社会がますます進展し運転免許返納という問題が浮上してきた今、車に依存した生活から歩いて買い物をする生活に変えていかなければなりません。同時に高齢の一人暮らし、一人暮らしになることから、街中に高齢者用のシェアハウス（共同住宅）を造って家族のように共に助け合って生活することを考える必要があります。

そのことが今後の我々の課題であり、結果として市街地の商店街の復活は必然であり、高齢社会に相応しい生活スタイルを確立することになるのではないのでしょうか。

